特集・市民の研究活動❷

◎日系ブラジル人 そのライフヒストリーとアイデンティティの諸相

■堀端みづき

1―はじめに
2―揺らぐアイデンティティ―Kさん
3―新たな生き方を求め―Cさん
4―日本人と結婚して―Iさん
5―ライフヒストリー研究の意味
―むすびにかえて

1―はじめに

❶―研究のきっかけ

九〇年の出入国管理法の改正により、それまでは一般の外国人同様の処遇であった外国籍をもつ日系の二世、三世らが、「日本人の配偶者等」「定住者」という資格で来日できるようになった。この資格には活動制限がないため、就労に関して制限の多い他の外国人に替わって、その日本への入国は急増した。中でも南米ブラジルからのいわばUターンは極めて多く、再入国者も含めると一九九一年のピーク時には九万六千三百三十七人に及んだ。

当初は単身での出稼ぎが多かったが、その後家族ぐるみの来日が増加し、滞日に伴う問題も、労働条件から、社会への適応、子どもの教育と様々に展開するようになっていった。彼らは一見すると一般の日本人と見分けがつかない。しかし一部を除き、日本語の読み書きはもちろん、会話も困難なことが多く、それゆえの誤解も生じた。研究者サイドから見れば、移民のUターンという、日本ではかつてない現象であり、格好の社会科学的調査の対象となった。こうして企業系の財団から資金の出る大規模なものから一学徒単独のものまで、多数の調査が行われ、ある研究者によれば「調査はし尽くされた」というほどであった。

しかしこれは多くの日系人（注①）が日本に流入して来た、その時点での短期的な視点によるものであると筆者は考える。彼らが日本の社会に同化という意味ではなくて適応し、個々のエスニシティやアイデンティティも含めた、より内面的な問題に直面するのは、労働環境や生活環境にも慣れ、そういう表面的な不安が取り除かれた後のことであろう。

確かにバブル経済の崩壊後、かつての雪崩を打ったような日本への出稼ぎはない。しかし再入国者の数は減少しておらず、反復出稼ぎが定着していると考えられる。ブームは過ぎ去った。そして彼らは定住という選択をする、しないにかかわらず、日本社会に埋没―あるいは潜在化しようとしている。彼らは父祖の国、日本で何を思い、どう生きようとしているのか、そして外国人に対して閉鎖的と言われる日本の社会で、彼らのアイデンティティ、ニッケイというエスニシティはどう変容していくのか、それを見極めたいと思ったことが、筆者が研究を始めるきっかけとなった。

❷―調査の経緯

日系人の集住としては、横浜市内では、鶴見区の潮田周辺が知られている。筆者もこの地域にアプローチすることを考えていたのだが、ある日偶然電車に乗り合わせた日系人のグループから、横浜に隣接するA市の教会で、毎週日曜日、日系人による集会が開かれていることを聞き、その教会を訪ねてみた。

A市には大手自動車会社の工場とその下請け企業が多く、これらの、特に中小の工場に多数の日系人が就労していると見られる。彼らは会社が用意したアパートや、賃貸マンションに暮らしているため、特定のマンションに日系人が集中するという現象が起こっている。

注① 以下特にことわらない限り日系ブラジル人を指す。

就労する場所、居住する場所共に集中しているため、彼らは容易に日系人コミュニティを作り、職場その他に関する様々な情報交換も、また休日のレクリエーションも、そのコミュニティの中で行っている。上記の教会での集会も、この枠の中にある。

毎週日曜日の午後開かれるこの集会は、プロテスタントのホーリネス教会（注②）のものである。この地域に住むようになった血縁者のグループが、自宅で聖書の勉強会を開いていたのが徐々に人数も増え、場所もこの地域にある教会を借りて開くようになったものだと、集会の参加者のひとりが教えてくれた。

教会で開かれる集会であるから、信仰心で多くの日系人が集まって来ているのはもちろんであるが、それだけでなく、日系コミュニティの交流の場として、より多くの人々を集めているように筆者には見受けられた。そこに一歩入れば、言語はポルトガル語のみであるが、まれに飛び込んで来る日本人も決して排除されるようなことはない。

筆者は九五年春から、この教会に幾度か通って集会に参加し、そこで出会った何人かの方に個人的にインタビューをお願いして、お話を聞かせていただいた（注③）。本小論では、この中から三人のライフヒストリー（注④）を取り上げ、そのアイデンティティのありようを中心として考察したいと思う。

2 揺らぐアイデンティティ―Kさん（三世、二十九歳、女性、既婚）（注⑤）

❶―ライフヒストリー概略

Kさんは、サン・パウロ州西部、日系コロニアとして知られるBという町で、男三人、女二人の五人きょうだいの第一子として生まれた。祖父母は父方、母方共に戦前移民である。父親は祖父母の代からの文房具店を経営していたが、十年前に交通事故で亡くなり、その後は母親が一家の大黒柱となっていた。

Kさんが幼い頃、両親は家業で多忙であったため、彼女らきょうだいの世話をしていたのは祖母であった。両親やきょうだいとはポルトガル語を使う一方で、この祖母や祖父と、彼女は日本語で会話をしていた。祖母はしつけに厳しく、孫たちが何か悪いことをすると、「日本人なのに恥ずかしくないの！」と叱ったという。祖父母は、非日系よりも「日系人の方が優れていると思っている」ので、Kさんのおじ、おばに当たる息子や娘が非日系と結婚することには強く反対したことをKさんは記憶している。

ブラジルで小中学校の就学年齢は七歳から十四歳であるが、Kさんはこの公立学校以外に、九歳から十六歳までの間週二回ではあるが、一世の牧師の妻が開いている私立のニホンガッコウ（注⑥）に通い、日本語の読み書きを学習した。このニホンガッコウではもちろんのこと、公立学校でもクラスの生徒はほとんど日系であった。町にある商店のほとんどが日系人の経営で、日本語で生活できる地域であったためであるが、このことによって、彼女は子どもの頃取り立てて「ニッケイ」という意識を持たずに暮らしていた。

祖父母が信仰していたホーリネス派での献身を決めたKさんは、高校を卒業するとパラナ州にある神学校で学んだ。自宅では日本食が多かったため、神学校の寮で出されるブラジル料理に飽きてしまい、白いご飯と味噌汁が懐かしかったと語る。それ以前と異なり、学生の大半は非日系であったから、そこで初めて彼女は自分がマイノリティであることを意識したのである。

卒業後、同じ神学校で学んでいた日系人（二世）と結婚し、いくつかの都市に夫妻で赴任した後、Kさんは九五年春に来日した。日本にやってくる日系人の圧倒的多数が出稼ぎ目的であるのに対し、彼女の場合は、日本に滞在するブラジル人の信仰の助けとなるため、ブラジルのホーリネス派から牧師である夫（二世、二十九歳）と共に、二年の任期で派遣されてきている。

❷―アイデンティティの諸相

Kさんは、生まれ育った故郷の町では、そこが日系コロニアであるため、特に自分が日系人であるというエスニック・アイデンティティを意識することなく過ごしていた。そもそもエスニシティとは、人間の集団を言語、生活様式、宗教などの特性に基づいて分類、区別する基準であるから、自分たちとは区別される別の人間集団がなければ、「エスニックなもの」は意識されることはない。彼女が子どもの頃に「ニッケイ」という表現をB町の中で使わないでいたことも当然であった。

高校卒業後、神学校に学ぶようになったKさんは、ブラジル社会においては自分はマイノリティであることを体感する。Kさんは、

注② アメリカ合衆国で一九世紀末にメソディストから分派した。近年、ブラジルで信徒数を急増させている、いわゆる福音派のひとつである。

注③ 個人により、日本語の理解の程度は異なるが、インタビューは日本語とポルトガル語の両方を使用した。

注④ life historyは「生活史」と訳されることもあるが、ここでは歴史学上の用語と区別するために「ライフヒストリー」とする。

注⑤ 属性に関してはインタビュー当時のもの。以下同様。Kさんに関しては、拙稿「ある日系ブラジル人に見るアイデンティティの諸相」『市民文化研究』第一六号、一九九六年三月で取り上げている。

注⑥ 公立の小中学校が「ブラジル学校」と呼ばれるのに対し、日系移民の子弟を集めて日本語の読み書きを教える私立の学校を「日本学校（ニホンガッコウ）」と呼んだ。

自分の生家、故郷のB町から出ることで自らのエスニック・アイデンティティを意識したのである。

日本にいるブラジル人の信仰生活を支えるため、またさらに神学を学ぶため、来日したKさんは、東京の神学セミナーに在籍して学ぶ一方で、前述のA市の教会での集会はもとより、週に二度ほどある聖書研究会にもしばしば参加する。神学セミナーでは日本語のみで生活、学習しているが、A市に来ると日系のコミュニティの中で、ポルトガル語ばかり使うことになる。彼女は夫同様、信徒たちから信頼されており、講話もある意味では夫以上に説得力をもっている。しかし故国ブラジルを離れ、日本という異文化社会にあるにもかかわらず、その日系コミュニティに彼女は自分の場所を見いだしていない。

「自分は日本人でも、ブラジル人でもない。『ニッケイ』というものでもない」。Kさん自身、不思議に思うことは、町中や電車の車内でいわゆる外国人を見かけると声をかけたくなることだという。しかし相手は彼女に気がつかない。それは彼女が外見上は日本人と区別できないからである。Kさんは自分がマイノリティであることを知っている。マイノリティの自分はここにあるのに、他からはそれが知覚されない。異なるものであるはずの自分が、周囲の風景に溶け込んでしまったかのような漠然とした不安が彼女の中にある。Kさんのエスニック・アイデンティティは今揺らいでいる。

3 新たな生き方を求め—Cさん（三世、二十一歳、男性、独身）

❶—ライフヒストリー概略

Cさんはマット・グロッソ・ド・スル州の小さな町で、男二人、女三人の五人きょうだいの次男、第四子として生まれた。両親はこの町で農業を営んでいる。父方の祖父母は佐世保出身、母方の祖父母は沖縄出身の戦前移民である。

Cさんの生まれた町には日系人は少なく、「五家族住んでいた」。そのため、小学校時代も、生徒の中に日系人は一、二人程度であった。周囲のブラジル人は、彼のことを「ジャポネース（日本人の意）」と呼ぶが、自分ではそうは思っていなかった。家庭でも、祖父母とは同居していなかったせいか、簡単なものの名前や親族の呼称以外、日本語はほとんど使わなかった。母親は日本食もブラジル食もつくっていたが、Cさん本人は後者の方が好きだった。自身、ニッケイというより、ブラジル人としての意識の方が強かった。しかし将来の結婚相手については、自分自身は「何とも思わない」が、両親は日系人を望んでおり、「文化が違う」とむずかしいから、日系との結婚が自然だと考えている。

Cさんは一九九〇年八月、高校を中退して、姉、友人らと一緒に来日した。その理由として彼は、「畑仕事をしているが、実際生活はそれほど楽ではない」両親を援助したかったことと、自分にも何か得るものがあると思ったと述べている。彼が日本に出稼ぎに来ることに両親は賛成したという。彼ら五人のきょうだいは、インタビュー当時短期来日中であった妹も含めると全員が日本で暮らしている。

来日前は「知らない国」に行けることに期待を持っていたCさんであったが、いざ日本に来てみると日本語がわからず、不安になった。当時、青年というよりまだ少年といった方がふさわしい、十六歳であった（注⑦）。仕事が休みの日には、別々に住んでいる兄、姉らと会うことが彼の楽しみであった。

来日直後は少し日本語を勉強したが、その後は語学の勉強という形では特に続けていない。話せるようになりたいと思ってはいるが、勤務時間が長く、仕事で疲れるため、できないままである。しかし、働いている工場で、同僚の日本人に質問して覚えるようにしている。職場には日本人の友人も、男性ばかりではあるが、多い。「若かったから適応が簡単だったと思う。」とCさんは語る。

❷—信仰との出逢い

来日して三年ほど経過した頃、職場の人間関係等で悩むことの多かったCさんは、知り合いに誘われて教会に行った。両親もキリスト教徒であったが、「ほとんどのブラジル人と同じ」で教会には行っていなかった。彼自身、聖書の上の知識としては神の存在を知っていたが、実感としては神に触れてはいなかったという。しかしこうして教会に通うようになった彼の周囲の問題は、神の助けにより解決できたとCさんは熱っぽく語る。

出稼ぎに来た当時、彼にとって大切なのはお金であった。しかし「今、自分にとって一

注⑦　多くの日系人の来日目的は出稼ぎであるから、入国者の年齢別の構成においては、二十歳代、三十歳代が圧倒的多数を占めるが、一九九〇年においてCさんのように十五歳以上、二十歳未満の就労可能な若年青年層の入国者が急増した。渡辺雅子「出入国管理法改正とブラジル人出入国の推移」、渡辺編著、一九九五、一九—三七ページ。

番大切なのは人を助けることだ」と、Cさんは言い切る。かつての彼自身のように、様々な問題を抱え、救いを必要としている人は多い。神に仕えることによってそういう人を救いたいと考えるCさんの希望は、「もし神がお許しくださるなら」牧師になることである。

しかしその希望を実現するのに、Cさんは大きな問題に直面している。それは学歴の問題である。すでに記したように、彼は高校を中退して来日している。牧師になるためには神学校に行く必要があるが、その入学には高校卒業の資格が必要なのである。現実に生活のために日本で働いているCさんにとって、高校に通うために帰国することは非常に困難であり、それゆえ自分自身の希望がはっきりしているにもかかわらず、これからの生活の具体的な方針は定まっていない。

本人によれば、すでに日本にも慣れ、ここでの生活を気に入ってもいる。週に一度、教会で夜間開いている聖書研究会に参加し、聖書の日本語は読むことができるようになった。日本語を話すことは依然として困難だが、聞いて理解できることで、日本での生活についてはかなり楽観的になっている。しかし一方で、いつまで日本に滞在し、その後の生活設計はどうするのかという根本的な問題は先送りされており、日本で見いだした新たな生き方は現実の生活に阻まれ、それにはアイデンティティをもち得ないでいる。

4 日本人と結婚して——Iさん（三世、三十五歳、女性、既婚）

❶—ライフヒストリー概略

Iさんは一九六〇年、女三人、男一人の四人きょうだいの第一子、長女として、パラナ州西部のEという町で生まれた。父親はおじの経営する写真屋を手伝い、母親は自宅で仕立物などの注文を請けていた。その後、Iさんが子どもの頃、父親は運送業を営むなどしていた。祖父母は父方、母方共に西日本出身の戦前移民である。

小中学校時代は私立のミッション系の学校に通う傍ら、一年ほどの短期ではあるが、ニホンガッコウにも通い、また絵画やバレエも習っていた。当時の経済状況等を考えると、極めて教育熱心な家庭であった。

彼女が十九歳のとき、父親が亡くなった。このためIさんは在学していた大学を中退し、故郷の町で再受験して、働きながら大学に通い続けたが、二十一歳のとき、よりよい職を求めてサン・パウロに出、銀行その後電器メーカーに勤務した。

日本の入管法改正後の一九九一年五月、それまで勤務していた会社をキャリアを捨てて退職し、母親と共に来日し、北関東の観光地にある旅館で仲居の手伝いとして働いていたが、前妻との間に二児のある日本人男性と知り合い、九三年四月に結婚した。

Iさんは九四年二月に男児を出産、上の子どもとあわせ、三人の男の子の子育てに追われているが、九六年秋、在住するF市の広報にポルトガル語学習サークルの広告を掲載、自宅に数人の生徒を集めてポルトガル語を教えるという、新たな活動に向け動き出した。

❷—長女としての倫理とエスニシティ

Iさんのライフヒストリーは別の機会に詳細に記述している（注⑧）ので、ここでは改めて繰り返さないが、彼女の意思決定、動機説明において極めて頻繁に用いられるのは、「長女だから」という表現である。すなわち、日本語を学んだこと、父の死後、大学を再受験してまで郷里に帰ったこと、自らのキャリアを捨てて来日したことと、そのすべてにおいて、Iさんは長女の責任を感じ、それが重いといいながらもそれを肯定している。

筆者はこれをIさんの「長女としての倫理」と捉えた。ここでいう「倫理」とは、いわば社会規範、行動原理のことであり、主観的に意味の与えられた行動規範を指す。（注⑨）しかしこの「長女としての倫理」は、他の文化的特性から独立して、彼女や彼女の両親らの意識の中にあるものではなかった。五人きょうだいの中で彼女だけが日本語の名前を付けられており、「ニホンジンの顔してるのだから」と彼女だけがニホンガッコウへ通わせられた。それも彼女が「長女だから」なのであるが、日系というエスニシティ、言い換えれば日系の文化、特性の継承を期待されたゆえのことであった。

❸—マイノリティ意識からブラジル人アイデンティティへ

日本で結婚し、子どもをもってからのIさんは、忙しい家事育児の合間をぬって、日本語教室にも通い、子どもたちの学校の教師や友だちの母親とも前向きにつきあっている。その限りでは、日本人の妻となった彼女は日

注⑧　拙論「イヴォネの半生—ライフヒストリーの試み」横浜市大経済研究所市民文化研究センター「都市・市民の国際化と異文化2」研究事業提出論文、一九九六。
注⑨　前山隆、一九八一、九ページ。

本の社会に適応することを重視しているようである。しかし同時に、外国人のみの母親のサークルや、教会での日系人の集会等にも積極的に係わるようになっている。その交際の範囲は日系ブラジル人に限らず、南米のスペイン語圏の国から来ている人たちにも及んでいる。「最近スペイン語ばかり使うの。」と笑うIさんの心の中には、日系のエスニシティの枠を越えて、日本社会におけるマイノリティの意識が現れているようである。

日本語がずいぶん上達したIさんは、末っ子がもう少し大きくなったら働きたいと以前から話していたが、日本語に自信がないため、工場等での単純作業しかできないであろうと、ブラジルでの職業経験と重ね合わせて悲観的になっていた。しかし三カ月ぶりにIさん宅を訪れると、市の広報に広告を掲載して、ポルトガル語を教えることになったと、生き生きと話してくれた。

民族的特性の中で最初に喪失するといわれる言語（注⑩）であるが、それを通じて自己実現をしようとする彼女は、日本社会に適応しながらも、ブラジル人としてのアイデンティティを確認しつつ生活していると筆者は考えている。

5 ライフヒストリー研究の意味 ―むすびにかえて

ライフヒストリー研究は人類学の手法としては、一九二〇年代以来、かなり一般的に用いられてきた。これは人類学の研究動向において、「個人中心的」民族誌への動きから誕生したものである。

とはいえ、特定個人の問題のみを扱った研究は、日本では依然として「科学ではない」といわれることすらある。「個人」は社会学や人類学においても、「存在上の事故（アクシデント）」として扱われ、レヴィ＝ストロースの構造人類学においては、生きた人間の姿は捨象され、その背後にあるとされたホモ・サピエンス全体に普遍の原理が最大の関心事である。（注⑪）

このような「概念世界」とシンボル体系が中心に据えられた構造主義的人類学に対し、ライフヒストリー研究は、生活世界とシンボル運用者としての個人を中心におくアプローチである。「文化が具体的現場で特定の状況に照らし合わされてどのような形で意味づけられ、活用されているのか」「生活主体としての個々人の主観的意味づけと了解がどのような具体像をもって展開されているのか」（注⑫）を知ろうとするものである。

具体的な手法としては、筆者はインタビューという形式をとった（注⑬）。インタビューといっても、マイクを向ける一問一答式の、被調査者が構えてしまうものではなく、小型のテープレコーダーをまわしてはいるが、ストーブを囲んだり、陽のあたる窓辺に座ったりと、語り手である被調査者がなるべく気負わずに語れるように配慮したつもりである。

実際にインタビューを行ってみて、膝をつき合わせて話を聞くことで、アンケート用紙や多数相手の面接では感じられない彼らの内なる思いに触れることができたと考えている。それをして筆者が挙げた研究成果であるというつもりはないが、ラングネス、フランクらがライフヒストリー研究について、「生活を書く、すなわち私たち自身の生活や、ほかの人びとの生活を書くという仕事をとおして、私たち自身が人間らしくなることができる。」（注⑭）といっているように、それぞれの状況で生活する彼らを、自分とは異なる世界に生きる者と見ることはできなくなる。筆者の拙い文章をとおして、ひとりでも多くの人が、この世界に生きる人間としての彼らを見るようになっていただければ幸いである。

付言1　本小論は、一九九四年度から三年の期間で行われた横浜市立大学経済研究所市民文化研究センター研究事業「都市・市民の国際化と異文化2」において、市民研究員という資格を与えられた筆者が行った調査研究に基づき、提出した論文から一部抜粋してまとめたものである。一市民である筆者にこのような調査研究の機会を与えてくれた本プロジェクトを広く市民のみなさんに知っていただくと共に、より多くの方がチャレンジして新たな研究成果を上げてくださることを切に願うものである。

付言2　筆者の稚拙なインタビューにもかかわらず、快く応じて下さった日系ブラジル人の方々に、この場を借りてお礼を申し上げたい。本当にありがとうございました。

〈横浜市立大学経済研究所市民研究センター　市民研究員〉

注⑩　綾部恒雄、一九九三、二五ページ。
注⑪　前山隆、一九九〇、五六―五七ページ。
注⑫　前山隆、一九八六、二八六ページ。
注⑬　ライフヒストリーの具体的手法としては、被調査者本人に語ってもらうインタビューの他、被調査者本人に書いてもらう方法、既存の資料を収集する方法等がある。
注⑭　ラングネス、フランク、一九九三、二一四ページ。

参考文献

綾部恒雄、一九九三、『現代世界とエスニシティ』、弘文堂。
川田牧人、一九八九、「ライフヒストリーの理論的展開と可能性」、筑波大学歴史人類学系民族学研究室編『族』、一―一九ページ。
ラングネス、L.L.、G.フランク、一九九三、『ライフヒストリー研究入門』、（米山俊直、小林多寿子訳）ミネルヴァ書房。
前山隆、一九八一、『非相続者の精神史』、御茶の水書房。一九八六、『ハワイの辛抱人―明治福島移民の個人史』、御茶の水書房。一九九〇、「社会人類学における構造と個人―〝Person〟概念からの照射―」、池田善昭ほか『社会構造における自己組織性』静岡大学人文学部池田哲学研究室、五六―八〇ページ。
中野卓・桜井厚（編）、一九九五、『ライフヒストリーの社会学』、弘文堂。
渡辺雅子（編著）、一九九五、『共同研究―出稼ぎ日系ブラジル人』上・下、明石書店。